

令和6年度 図画工作・美術科 研究のまとめ

天野 紳一・重本 優紀・島谷 あゆみ

1 図画工作・美術科本来の魅力に迫るための教師の資質能力について

(1) 図画工作・美術科が考える「教師の資質能力」の具体

図画工作・美術科の教師として求められる資質能力とは何かを問う時、その基盤となるのはこの教科が形式陶冶をめざすものであるという理念である。これは「美術による教育 (Education through Art)」(Herbert Edward Read, 1893-1968)の理念とも重なるものであり、この教科の学びを通して培われ、豊かに高められた情操が児童・生徒一人一人の人間形成に何らかのよい影響をもたらすものであってほしいと強く願う。

学習指導要領には児童・生徒の発達段階に応じた目標と内容、育てるべき資質・能力について明確に示されているが、その達成のためにどのような題材をどのように扱うのかについては、指導者の裁量に委ねられている部分も大きい。従って図画工作・美術科の教育内容は必ずしも「系統的・段階的な教授」というスタイルに囚われることなく、目標が十分に吟味されてさえいれば、目の前の児童・生徒の興味・関心やレディネスに合わせてある程度柔軟に、創造的に展開できる。つまり、教員の経験や造形的な感性、アイデア、センスといった資質能力を活かしたダイナミックな題材解釈(題材開発)が可能であり、教科本来の魅力に迫る授業づくりの大きな鍵もここにあると考えている。

資質能力	図画工作・美術科が考える「教師の資質能力」の具体
授業構想力	【目標設定(翻案)】 ・児童・生徒がそれぞれ自分なりの見方や感じ方、感覚、感性を存分にはたかせながら主体的、追求的に取り組むことのできる目標設定をする。 <u>(ディレクション能力)</u> 【題材開発(翻案)】 ・目標に照らしてめざす児童・生徒像を具体化し、学習者の傾向やレディネスに照らして題材を解釈し、開発する。
授業実践力	【環境設定】 ・児童・生徒が十分に試行錯誤できるような学習環境の整備と十分な時間の保障に努める。 【指導技術】 ・身のまわりの多様な造形的要素、新たな知識や技能、仲間との関わり、美術作品との出会い等に影響を受けながら、自分にとって価値のあるものを求めて試行錯誤ができるよう個や集団に働きかける。 【多様性への対応】 ・児童・生徒の多様性を共感的に受け止め、価値付けるとともに、個々の思いの具現化のために必要に応じて適切な支援を行う。 (知識・技能の紹介、メタ認知の促進、ファシリテート等)
授業分析 ・評価力	【評価法の工夫】 ・「振り返りのための振り返り」ではなく、学習過程の中に自然に位置付いた振り返りの方法と場を工夫する。 【プロセス評価】

	・ポートフォリオやタブレット等を活用して学びのプロセスを丁寧に記録し、個々の思いや造形的な意図に対するメタ認知を促すとともに、プロセス全体の評価に努める。 【授業分析】 ・児童・生徒と十分に共有したパフォーマンス課題のもと、必要に応じて<u>ルーブリック評価（集団あるいは個別）</u>を取り入れて個々の 学びの達成度を把握・分析し、学びにフィードバックする。 【授業改善（翻案）】 ・授業分析・評価をもとに、よりよい学びをめざして授業改善を行う。
--	--

実際の授業づくりにあたって特に重視したい視点と、そこで必要とされる教師の資質能力について、以下に述べる。

① 児童・生徒の理解を深め、学びへの期待を高める題材選択と目標設定（翻案→授業構想力）

「自分さがし」の営みである図画工作・美術科の授業は、学習者の主体性を抜きにしては成立しない。従って最も大切なのは動機付けの過程である。児童・生徒がそれぞれ自分なりの見方や感じ方、感覚、感性を存分にはたかせながら主体的、追求的に取り組むことのできる題材と目標を設定する。

図画工作・美術科の学習は決められた答のない創造的、探求的な活動であり、目標は常に児童・生徒一人一人に内在していなければならない。個によって、それは題材全体を通して揺るがないものになるかもしれないし、活動の過程で修正され、移り変わっていくものであるかもしれない。いずれにしても「おもしろそう」「やってみよう」という興味・関心を引き出し、「こうしてみよう」とイメージを膨らませるきっかけをつくることができるかどうかは題材の導入にかかっている。題材の概要と目標、方向性を実際の授業場面でどう伝えるのか。つまりディレクターとしての能力は、教師に求められる大きな資質能力の一つである。

② 試行錯誤を可能にする環境設定（翻案→授業構想力／授業実践力）

児童・生徒の発想は、一定の方向性や段階に沿って生まれ、高まっていくとは限らない。身の回りの様々な造形的要素、新たな知識や技能、仲間との関わり、美術作品との出会い等に影響を受けながら、児童・生徒は自分にとって価値あるものを求めて試行錯誤を繰り返す。「つくり→つくりかえ→つくる」「気づき→気づき直し→気づく」という試行錯誤のプロセスの中でもとりわけ、「つくりかえる」「気づき直す」というエネルギーを伴う行為を容易に行うことができるような学習環境の整備と十分な時間の保障に努める。

③ ポートフォリオを活用したプロセスの記録（授業分析・評価力）

表現や鑑賞の学びの中で思い付いたこと、試しに表現してみたこと、気づいたこと、気づき直したことなどは、時間の経過とともに消えて無くなってしまう。例えば算数科で答を求めるための思考の道筋や計算の跡をノートに残すように、造形的な思考のプロセスを記録しておくことが大切である。

表現領域では、試行錯誤の中で生まれた試し描きや習作、製作途中の作品の画像、学びの過程で生まれた気づきのメモなど、鑑賞領域では、初発の思いの記録（例えば付箋等）に書き記した物、仲間と交流する中で生まれた気づきや交流のプロセスそのものがわかるようなワークシートなどが考えられる。これらを収めたポートフォリオは、学習者にとって自らの学びの足跡を客観的に捉えるための重要な手がかりであると同時に、授業者にとってはさらなる授業改善へのヒントに満ちた資料と

なる。

ポートフォリオの作成についてはタブレットの機能を効果的に活用する。

④ 学習過程に位置付いた振り返り（授業構想力／授業分析・評価力）

学習過程の途中で、あるいは終末での振り返りを丁寧に行うことで、自分自身の造形的感性に対するメタ認知を促すと同時に、それぞれの思いがどのような形で実を結んだのか、プロセス全体を評価することが可能になる。自分は何をどのように表現したかったのか、あるいは表現しなかったのか。他者にどんな思いを伝えるために、どんな手段や言葉を用いたのか。そしてそれは伝わったのか。表現や鑑賞の学習活動と切り離された「振り返りのための振り返り」ではなく、児童・生徒自らが「自分さがし」という主体的なモチベーションをもって取り組むことができるよう、ワークシートの構成や学習形態を工夫しながら学習過程に位置付いた振り返りの場を設定する。うまくいったこともそうでなかったことも含めて自らの学びの軌跡を大切に振り返り、肯定的に評価することを繰り返しながら「自分らしさ」が培われるものと考えている。

そのためには、それぞれの授業場面において子どもたちがどのような学習をしたいのか、つまり一人一人が追求したい目標がより明確になっていることが望ましい。そして、その目標に基づいたパフォーマンス課題に対して、到達度を計るためのルーブリックの作成を試みる。もちろん、パフォーマンス課題やルーブリックが妥当であるのかについては、指導者が掲げた目標と照らし合わせながら十分に吟味する必要がある。

これら①～④を踏まえ、今年度は特に目標設定、及びそれに応じた指導者のルーブリックと学習者のルーブリックとの摺り合わせに焦点を当てて研究を進めた。

（２）図画工作・美術科の特性に応じた見取りの方法について

- 児童・生徒のアイデアシート、発言、作品等といったパフォーマンスの分析・評価
- ポートフォリオに記述された内容をもとにしたメタ認知のプロセスの分析
- 試行錯誤のプロセスや気づきの変容を記録した振り返りシートの量的・質的分析
- 学習集団及び個を対象としたパフォーマンス課題の設定とルーブリック評価

（３）授業公開で見取った児童・生徒の姿の例

資質能力	児童・生徒の姿	手立て
授業構想力	初めは子どもが一方的に絵に関する情報を伝える場面が目立ったが、ゲストが「どうしてそう思ったの?」と問い返したところから双方向のコミュニケーションが生まれた。	・「創造的コミュニケーション能力」「答えのない問いに向かうためのコミュニケーション能力」の育成をめざし、視覚以外の多様な感覚を通して鑑賞し、そこで得た情報を付箋を用いて相手に伝わるように言語化する学習を積み重ねた。 ・ゲストティーチャーの招聘

	子どもたちは主体的に自ら進んで表現しており、授業が終わってもなお、表現を続けていた。	・児童がそれぞれ自分なりの見方や感じ方、感覚、感性を存分にはたかせながら主体的、追求的に取り組むことのできる目標設定をする。
	素材の扱い方がスムーズで、主体的に制作に取り組むことができていた。	・指導計画の中で素材の扱い方を練習する時間を確保し、制作に生かせるようにした。
授業実践力	小学1・2年生が和気藹々と協力し、よくつぶやきながら制作に取り組むことができていた。	・活動に集中させたり気付かせたりする言葉がけの工夫
	子どもたち一人ひとりが、自分のBeautiful&Emotionalな「青空」を表現していた。	・十分に試行錯誤できるような学習環境の整備と時間の保障に努める。
	アイデアスケッチを立体化することにつまずく様子があった。	・アイデアスケッチから制作方法を提案する手立てをとった。
授業分析・評価力	題材中盤の振り返りで「ゲストにいろいろなことを教えてあげたい」としていた児童が、本時後には「ゲストからヒントを教えてもらいながらできた」と書いていた。	・アートを通して新たな自分を探そうとする児童に育てたいという願いのもと、児童個々が自己の変容に気づく方策として1時間ごとの学習過程に沿った振り返りを記述するポートフォリオを導入した。
	自分の作った作品を見てほしい！見せたいというパワフルな感情の発露が見られた。	・振り返りのための振り返りではなく、学習過程の中に自然と位置付いた振り返りの方法と場を工夫する。
	試行錯誤を繰り返し、個々の表現を楽しんでいた。	・制作の初めに確認できるよう、ロイロノートに次の時間のめあてを書いておく手立て

2 研究の成果と課題

成果	○現代社会では、「創造的コミュニケーション能力」「答えのない問いに向かうためのコミュニケーション能力」の育成が重視されている。その意味で今回の授業実践は興味深いものであった。 ○レディメイドな授業ではなく、児童生徒の多様な実態に合わせてやり方を変化させオーダーメイドの授業を構想する資質能力、児童生徒の見方や感じ方の幅を広げたりしていく資質能力が、図画工作・美術科の教員に求められることが分かった。また、多様な児童生徒に合わせていくには、教育の技術（理論を利用し多様に変化させていく）が必要であることが分かった。 ○児童生徒のつぶやきから授業を発想したり、自分を表現したくなるような題材の手渡し方をしたりすることができた。
----	--

	○児童・生徒と教員の信頼関係が、授業の中での安心感に繋がっていた。目標を明確に提示した後は、指示を少なくしたり十分な活動時間を確保したりする環境を作ったことで、児童・生徒は主体性をより発揮していた。授業後も、学習内容と日常生活を結び付け、学び続ける姿が見られた。 ○タブレット・スクリーンを効果的に活用した授業作り、見通しを持ちやすい板書ができた。タブレットを使った試行錯誤の方法が主体性を引き出した。
課題	●この教科の評価とは、いわゆる親学問のある教科の評価とは異なる性質を持っている。ある普遍的な価値や共通の概念に向かっていく学びではなく、答えは一人一人の中にあるからである。図画工作・美術科の評価では、その人なりの良さを見い出し、認め、価値付けようとする意識が欠かせない。 ●一方で、教科特有の「造形的な資質能力」を引き出し、伸ばし、高めていくために、我々教師がどのような手立てを講じるのかについてはさらに研鑽が必要である。 ●集団と個が関わる活動における個々の評価、多様な価値観が生まれる教科のもとでの評価、構想段階の評価が難しい。 ●題材設定のねらいを達成するためにも、「見えないところ」への意識や「集中」への意識をもっと高めるべきであった。 ●子どもたちにもっと造形感覚的な葛藤が生まれるよう、共に話をしながら指導していきたい。 ●情報モラル・肖像権順守の学校体制を作る。